スポーツ行動に関する実証的研究(3)

——スポーツ種目選択行動について——

松 田 泰 定 (広島大学)

東 川 安 雄 (広島大学)

荒 井 貞 光 (広島大学)

(昭和53年7月28日 受付)

A Corroborative Research on the Sport Behavior (3)

——On the Choice Making Behavior to Sport Events——

Yasusada Matsuda*

Yasuo Higashikawa*

Sadamitsu Arai**

Abstract

This is the third of a series of researches designed to clarify the mechanism of sport behavior. The purpose of the present research is to elucidate various aspects of conditions which contribute to the choice making behavior to sport events. To attain the purpose, sport events were classified into three categories, i. e., individual events, combative events of man to man type and the events of team sport. Analysis was made by Hayasi's Quantification Scaling (type 2) according to sex and frequency of sport participation regarding each combination of the two of three categories of the events as an external criterion. Such five conditions as Actual Sport Participation, Subjective Aspects, Objective Aspects, Mass Media and Sport Experience which consist of twenty-one variables were employed as explanatory variables. Subjects were 2075 adults of both sexes. Main results may be summarized as follows:

1. Discriminant analysis among the participants in each category of sport events was conducted according to respective combinations by aid of the explanatory variables created in the present research. The result showed that correlation ratios differed with sexes and frequencies of sport participation, that correlation ratios of female participants were higher than those of male participants, and that the correlation ratios of the continuous sport participants (persons who participate in sport once or more a week) tended to be higher than those of non-continuous participants (less than once a week). In other words, females and continuous participants were apt to be affected more strongly, in terms of making choice of sport events, by the conditions adopted in the present research than males and non-continuous participants.

* Hiroshima University, Faculty of School Education, Hiroshima (734)

** Hiroshima University, Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima (730)

2. In case of males, especially continuous males, the discrimination was not distinctive between combative events and team events, while in case of females, especially non-continuous females, the discrimination between individual events and combative events was not clear enough. The discrimination between combative events and team events was most distinctive in female un-continuous participants in contrast with male participants.

3. The result of the examination in contribution strength of five conditions showed that the condition Actual Sport Participation which consisted of such variables as place, time, fellows and leaders was strongest in all discriminations, and Subjective Condition including such seven variables as view of leisure time, physical skill, preferential attitude toward sport, the need for physical activities, the attitude of utilizing sport activities, confidence in one's own physical fitness, and insufficient feeling for physical activities came next.

4. As for other conditions, Sport Experience (variables are the chance of beginning sport, sport experience at school in school days and sport experience outside school in school days) of continuous males and Objective Conditions (marriage, children, income, living environment and leisure time) of continuous female contributed strongly to the choice making regardless of the difference of the combinations.

Non-continuous males showed almost the same tendency as the case of continuous males. As to non-continuous females Objective condition contributed strongly to the choice making in the combination of individual events and combative events, while the condition Sport Experience tended to contribute strongly in the combination of combative events and team events and also in the combination of team events and individual events.

5. The examination in contribution of individual variables was conducted by partial correlation coefficients, and the result showed that the aspects of contribution differed with the combination of sport events, sexes and frequencies of sport participation. Details are shown in Table 4 to 7.

(Yasusada Matsuda, Yasuo Higashikawa, Sadamitsu Arai : A Positive Research on the Sport Behavior (3) —On the Choice Making Behavior to Sport Events—*Jap. J. Phys. Educ.*, Vol. 24, No. 1, June., pp. 1~11)

I 問題

我々のスポーツ行動^{注1)}に関する一連の研究²⁾⁴⁾は、人々のスポーツへの参与のメカニズムを、分析、検討し、人々のスポーツへの参与の条件を整備していくうえでの基礎的な資料を得ようとするものである。そのためには、スポーツ行動を解明するのに必要となる諸側面についての研究の方向と、その各々の側面に働く要因を、体系づけられたより広汎な枠組から選定していく仮設、およ

び、これらの要因の相互作用も考慮に入れて分析していく研究方法とが必要となろう。

一般に、人がスポーツ活動に参与しようとする場合、どのような目的のために、どのような種目を、どの程度行うか、また、このために集団参加を行うか等の意思決定¹⁾を、常に行っているものと考えられる。つまり、スポーツ活動への参与は、意思決定の連続から成立しており¹⁵⁾、井関¹⁰⁾が社会行動において述べているように、「客体的条件・主体的条件を刺激として受け入れてからさ

さまざまな要因の作用を受け、かつ複雑な心的過程を経たのちに顕在的反応をアウトプットする。」といったメカニズムがここでは仮定されているが、これはスポーツ行動が社会行動の一類型であると考えると十分あてはまる命題であろう。この顕在的反応としては、前述したようにスポーツ活動の実施頻度や実施種目、さらにはスポーツ活動における集団参加などが考えられるが、これまではこれら顕在化された反応のみを取り上げ、頻度や比率を用いてその実態や傾向を分析している例が多くみられる。

最近になって、単に実態や傾向を把握するのではなく、スポーツ行動が顕在化していく過程で関与している要因の様相を解明しようとする研究が行われてきている。前研究⁴⁾は、スポーツ活動の実施頻度に関与する要因の解明について検討したものであるが、前述したごとく、人がスポーツ活動に参加しようとする場合、実施の目的、種目、頻度等の意思決定は、相互に関連しながら常に繰り返し反復し、フィードバックされながら一定の方向に強化されているものと考えられる。

このように考えた場合、スポーツ行動の解明は実施頻度の側面からのアプローチだけでは不十分であることは言うまでもなく、他の側面についても前研究との関連をはかりながら継続的に研究していく必要がある。

II 仮説と分析の枠組み

本研究においては、これまで述べてきたことをふまえながら、スポーツ活動における種目選択行動を取り上げ、これに関与する要因を解明していく。すなわち、特定のスポーツ種目を実施するには、どのような要因の関与をどの程度うけているかを明らかにしようとするが、その前に分析の枠組を明確にしておく必要がある。

その第1は、運動・スポーツの類型化に関するものである。現代では、非常に数多くの種目が行われており、しかも質的にみても、競技的なものから手軽に行われるものまで極めて多様な行われ方をしている。今回は、このように多様な活動状況を、藤原⁶⁾がスポーツとしての特性から行った分類に従い、「個人種目」「対人種目」「集団種

表1 運動種目の分類

運動類型	各 運 動 種 目
個人種目	散歩, 体操, ランニング, なわとび, 陸上競技など
対人種目	卓球, バドミントン, ダンス, テニス, フェンシング, キャッチボールなど
集団種目	ソフトボール, 野球, サッカー, ラグビー, バレーボール, バスケットボールなど

目」に分類・整理して用いることにする。個々の種目は表1に示すように分類した。

分析の枠組として第2に考えておくべきことは、スポーツ種目選択行動に関与するものとして、どのような要因や変数を用いるかといった問題である。これまで、このような種目選択行動に関する研究は殆んどみられず、なされている場合でも競技者を対象として、心理的或いは体力・運動能力的側面からの、いわば適性論に基づいた研究に限られている。したがって、客体的条件がほぼ同じであり主体的条件のみに焦点を絞ることができると考えられる競技者と、客体的条件についても多様であると考えられる一般社会人とは、指定すべき要因が必然的に異なってくる。ここでは、前研究⁴⁾で用いた主体的要因、客体的要因から構成されるモデルを、人々のスポーツ行動をより体系的に明らかにするためにさらに分類し、現在活動要因、客体的要因、主体的要因、運動経験要因、マスコミ要因の5要因にし、より広汎な枠組を設定した。各々の要因とこれらを代表する変数は、表2のとおりである。

ところで、これら5つの要因群が種目選択行動に関与する様相を検討していく場合、要因間の相互作用も含めて同時に分析することが可能な多変量解析の手法が必要となる¹⁾。本研究のように定性的な変数を扱う場合には、林の数量化理論Ⅱ類が有用であると考えられる。この方法を用いた先行研究としては、消費者行動や投票行動などに関する研究で多くみうけられ、体育・スポーツにおいては、池田⁷⁾や永吉¹⁰⁾が行った研究があげられよう。一般に、このような統計モデルを用いた場合、結果の精度は「全体として²⁾」しか論ぜられないので、一方で結果の精度を高めることと、他方で特定の対象者のみに強く関与していると考

表2 各要因とこれを構成する変数およびその内容

要因	変数	内 容
現在活動要因	場 所	平日のスポーツ活動の実施場所
	時 間 帯	平日のスポーツ活動の実施時間帯
	仲 間	平日のスポーツ活動での仲間
	指 導 者	指導者の有無
客体的要因	結 婚	既婚・未婚
	子 供	子供の有無
	所 得	年収
	環 境	住居の環境
	余暇時間	平日の余暇時間
主体的要因	余暇観	仕事と遊び観
	技 能	運動技能の自己評価
	好嫌態度	スポーツ活動に対する好意的・非好意的態度
	欲 求	運動欲求
	効用態度	スポーツ活動に対する効用的・非効用的態度
因	体力の自信	体力の自己評価
	運動不足感	運動不足感の自己評価
マ要スコミ因	テ レ ビ	スポーツ番組の視聴
	新 聞	スポーツ欄購読
運動経験要因	きっかけ	運動・スポーツを始めたきっかけ
	学校時代	学校時代の授業、クラブ以外での運動経験
	クラブ経験	学校時代の運動クラブ加入経験

えられる要因をうまく引き出すことができるように、対象者の特性を考慮しながら集団分割を行う必要がでてくる⁹⁾。これは分析の枠組として、第3に考えておくべき問題であろう。ここでは、前研究⁴⁾の集団分割の基準を用い、性別およびスポーツ活動実施頻度別に対象者を分割した。すなわち、男女各々において、活動が安定して実施されている段階での種目選択を検討するために継続的实施者群を、また活動が成立している段階として非継続的实施者群を分別して分析した¹²⁾。また、分析にあたっては、個人種目、対人種目、集団種目の3者を外的基準とした判別ではなく、個人—対人間、対人—集団間、集団—個人間の組み合わせを用い、この各々の判別に前述した要因および変数がどのように関与しているかを比較・検討することにより、それぞれの種目選択での微妙な差や具体的な結果が得られるようにした。

Ⅲ 方 法

1. 調査対象者

本研究では、1974年に20才以上の広島県民を対象として行われた「広島県民の運動・スポーツに関する調査」の資料の中から、年4～5回以上運動・スポーツを実施しており、しかも表1に示している個人種目、対人種目および集団種目のいずれかを実施している者を抽出して対象者とした。対象者を性、実施頻度、実施種目別に示すと表3のとおりである。

表3 性、実施頻度、実施種目別の対象者数

類 型	性 別		女 子	
	実 施 頻 度	男 子	女 子	
		継続的実施者	非継続的実施者群	継続的実施者群
個 人 種 目		350	315	169
対 人 種 目		308	203	77
集 団 種 目		160	96	103
計		818	614	349

2. 取り扱う変数

スポーツ活動における種目選択行動に関与する要因として5つの要因を指定し、さらにこの各々の要因を代表する変数をアブリオリに選定し、全部で21変数を説明変数として用いた。この各々の要因と変数については表2に示している。

3. データの解析法

個人、対人、集団の各実施者群の中から2つの種目実施者間の判別が行えるように組み合わせ、スポーツ実施種目を外的基準とし($T=2$)、21個の変数からなる5つの要因群を説明変数として林の数量化理論Ⅱ類を用いて分析する。これにより、要因(変数)全体の関与の程度を相関比(η^2)、個々の変数の関与については偏相関係数により検討する。また、各要因の関与を検討するために、計算過程においてステップワイズによる変数追加を行い¹²⁾、各々のステップごとに相関比を求め、これにより追加した要因の偏相関比¹³⁾を算出した⁷⁾。要因の追加は、影響度が高いと仮定した順序で行った(図1参照)。なお、計算には広島大学計算センターの電算機 HITAC 8700 を使用し、プログ

図 1 要因の追加の順序

ラムは SPSS の HAYASI 2 を利用した。

IV 結果と考察

1. 判別の精度

スポーツ種目選択行動における要因および変数の関与のしかたを取り扱う前に、判別の精度についての検討を行う。すなわち、要因(変数)全体が種目選択行動にどの程度関与しているかをみようとするものであり、これにより今回の研究で用いた要因群(変数群)が説明変数としてどの程度有効であったか、また、性、実施頻度別によってその働きがどのように異なっているかを検討しようとするものである。この判別の精度は相関比(η^2)によって示されるが、種目選択の各々の組み合わせにおける判別結果は、性、実施頻度別にまとめ、すべての要因が追加された最終段階の値を示す表 4～7 を参照されたい。

これによると、男女とも非継続的实施者群(以下、非継続型とする)よりも継続的实施者群(以下、継続型とする)における方相関比がやや高い傾向を示しており、特定の種目を継続的に実施しようとするれば、そこには個々の要因或いは特有な要因の関与をより強く受けるものと考えられる。また、継続型、非継続型を問わず、すべての判別において男子よりも女子の方が相関比が高い傾向を示しており、女子の方が要因の関与を強く受けていることが理解される。これらのことは、種目選択における要因の関与のメカニズムをみていく上で基本的に理解しておく必要がある。

次いで、実施種目間の判別についてみていくと、男子では対人一集団種目間の判別が十分でなく、特に継続型においてその傾向が著しい。

一方、女子では個人一対人種目間の判別が十分でなく、特に非継続型においてその傾向が著しい。また、女子の非継続型において、対人一集団種目間の判別は男子とは逆に最も良い結果となっている。以上のように、要因(変数)全体が関与した結果についての特徴がみられたが、より具体的

的な傾向は次に述べる各要因の関与の様相を通して理解することができよう。

2. 要因の関与の様相

(1) 継続的实施者群について

要因の関与は偏相関比により、また変数の関与は偏相関係数によって検討する。これらの結果は、表 4～7 および図 2～5 に示している。まず、種目選択行動に最も強く働いている要因は、男女、組み合わせに関係なく一貫して現在活動要因である。これは、この要因が「時間帯」「場所」「仲間」「指導者」などのそれぞれの種目が実施される場と密接に関係する変数から構成されているためであると考えられる。次に、現在活動要因と同様に男女、組み合わせに関係なく主体的要因の関与が高く、特に女子においてその傾向が著しい。以下、男子では、運動経験要因、客体的要因の順に関与する傾向がみられるが、これらの差はあまり顕著でなく、しかも偏相関比も低い結果となっている。前項での対人一集団種目間の判別の低さは、現在活動要因の関与の低さに起因していることが理解される。一方、女子においては関与の強さが男子と異なり、客体的要因が運動経験要因より強く働く傾向がみられる。また、性差で比較すると、上記の違いに加えて、個々の要因の働きは女子の方が強い傾向がみられる。これは、女子の種目選択行動は、男子と比較して多くの要因の関与を強くうけて成立しているものと解釈される。マスコミ要因は、男女、組み合わせに関係なくあまり働いていない。

(2) 非継続的实施者群について

前述したように、男女とも継続型と比較して相関比は低い傾向にあるが、この結果は現在活動要因の関与のしかたに依存しており、実施頻度が高い程実施の場と関連した要因の関与を強く受けるといった妥当な結果を示している。このような傾向を示しながらも、非継続型では継続型と同様に、男女、組み合わせに関係なく、現在活動要因の関与が最も強く、次いで主体的要因の順となっ

表 4 男子の継続的実施者群における分析結果

要因	変数	個人種目——対人種目				対人種目——集団種目				集団種目——個人種目			
		偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比
現在生活動因	時間帯	0.2031	③	0.222	0.028	0.1594	③	0.131	0.025	0.1849	③	0.229	0.023
	場所	0.2723	①			0.3269	①			0.2295	①		
	仲間	0.2691	②			0.1037	⑦			0.2104	②		
	指導者	0.0790	⑪			0.0520	⑬			0.0229	⑬		
客体的要因	結婚	0.0133	⑳	0.243	0.036	0.0097	㉑	0.152	0.039	0.0126	⑬	0.246	0.040
	子供	0.0236	⑬			0.0531	⑬			0.0136	⑬		
	所得	0.1003	⑦			0.0655	⑪			0.0626	⑬		
	環境	0.0976	⑧			0.0862	⑨			0.0949	⑧		
主体的要因	余暇時間	0.0526	⑭	0.269	0.003	0.1323	④	0.184	0.001	0.1205	⑤	0.275	0.001
	余暇観	0.0824	⑩			0.1040	⑥			0.0935	⑨		
	技能	0.0626	⑬			0.0716	⑩			0.0897	⑬		
	好嫌態度	0.0181	⑬			0.0624	⑬			0.0381	⑬		
	欲求	0.1195	⑤			0.0304	⑬			0.0896	⑬		
	効用態度	0.0741	⑬			0.1650	②			0.1027	⑦		
	体力の自信	0.0380	⑬			0.0495	⑬			0.0513	⑬		
	運動不足感	0.1032	⑥			0.0612	⑬			0.0878	⑪		
ファミコ因	テレビ	0.0397	⑬	0.271	0.024	0.0307	⑬	0.185	0.025	0.0211	⑬	0.276	0.028
	新聞	0.0302	⑬			0.0462	⑬			0.0088	㉑		
運動経験因	きっかけ	0.1454	④	0.288	0.024	0.1273	⑤	0.205	0.025	0.1498	④	0.296	0.028
	学校時代	0.0834	⑨			0.0950	⑧			0.1152	⑥		
	クラブ経験	0.0024	㉑			0.0277	㉑			0.0102	㉑		

表 5 男子の非継続的実施者群における分析結果

要因	変数	個人種目——対人種目				対人種目——集団種目				集団種目——個人種目			
		偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比
現在生活動因	時間帯	0.1717	③	0.193	0.019	0.1160	⑪	0.102	0.037	0.1543	④	0.165	0.030
	場所	0.2371	①			0.3179	①			0.2084	①		
	仲間	0.2258	②			0.1309	⑨			0.2012	②		
	指導者	0.0165	⑤			0.0221	㉑			0.0253	㉑		
客体的要因	結婚	0.0536	⑬	0.208	0.059	0.1505	⑤	0.134	0.084	0.0861	⑭	0.189	0.057
	子供	0.0551	⑬			0.1436	⑥			0.0779	⑬		
	所得	0.0651	⑬			0.1123	⑬			0.1083	⑩		
	環境	0.0864	⑪			0.0830	⑬			0.0996	⑪		
主体的要因	余暇時間	0.0789	⑬	0.252	0.007	0.1700	④	0.201	0.026	0.0929	⑫	0.233	0.015
	余暇観	0.1054	⑨			0.1715	②			0.0805	⑬		
	技能	0.0302	㉑			0.1707	③			0.1090	⑨		
	好嫌態度	0.1093	⑧			0.0956	⑬			0.0421	⑬		
	欲求	0.0707	⑭			0.1309	⑨			0.1356	⑤		
	効用態度	0.1671	④			0.0898	⑬			0.1709	③		
	体力の自信	0.0596	⑬			0.0623	⑬			0.0201	㉑		
	運動不足感	0.1187	⑦			0.0890	⑬			0.0620	⑬		
ファミコ因	テレビ	0.0316	⑬	0.257	0.021	0.1340	⑧	0.221	0.024	0.1143	⑧	0.244	0.023
	新聞	0.0829	⑫			0.1357	⑦			0.0898	⑬		
運動経験因	きっかけ	0.0885	⑩	0.272	0.021	0.1140	⑫	0.239	0.024	0.1203	⑥	0.261	0.023
	学校時代	0.1291	⑥			0.1064	⑭			0.1167	⑦		
	クラブ経験	0.0142	㉑			0.0201	㉑			0.0645	⑬		

表 6 女子の継続的实施者群における分析結果

要因	変数	個人種目——対人種目				対人種目——集団種目				集団種目——個人種目			
		偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比
現在生活動因	時間帯	0.1746	⑦	0.320	0.079	0.4372	①	0.285	0.130	0.2037	⑥	0.338	0.078
	場所	0.4780	①			0.2997	④			0.2852	①		
	仲間	0.0936	⑭			0.3075	③			0.2058	⑧		
	指導者	0.2067	③			0.0153	⑳			0.0700	⑰		
客体的要因	結婚	0.0863	⑮	0.370	0.143	0.0921	⑮	0.367	0.138	0.0340	㉑	0.386	0.152
	子供	0.0154	㉒			0.0944	⑭			0.0680	⑱		
	所得	0.1757	⑥			0.1782	⑩			0.2287	④		
	環境	0.1605	⑧			0.1205	⑬			0.1402	⑫		
主体的要因	余暇時間	0.0815	⑰	0.449	0.017	0.2314	⑥	0.444	0.047	0.2166	⑦	0.467	0.011
	余暇観	0.1301	⑫			0.2138	⑧			0.1842	⑯		
	技能	0.0776	⑱			0.0186	㉒			0.1709	⑪		
	好嫌態度	0.1927	④			0.0438	⑰			0.2181	⑤		
マミ要因	欲求	0.1529	⑨	0.458	0.019	0.3305	②	0.469	0.075	0.2667	②	0.473	0.063
	効用態度	0.1870	⑤			0.1954	⑨			0.1341	⑬		
	体力の自信	0.1351	⑪			0.1317	⑫			0.0451	㉒		
	運動不足感	0.2098	②			0.0334	⑱			0.2168	⑥		
運動経験因	テレビ	0.0813	⑱	0.468	0.018	0.0331	⑱	0.506	0.138	0.0517	⑱	0.504	0.072
	新聞	0.1408	⑩			0.2520	⑤			0.0891	⑯		
	きっかけ	0.1286	⑬			0.1537	⑪			0.2291	③		
	学校時代	0.0841	⑱			0.2178	⑦			0.1030	⑬		
運動経験因	クラブ経験	0.0079	㉑	0.326	0.018	0.0728	⑯	0.500	0.138	0.1170	⑭	0.433	0.072

表 7 女子の非継続的实施者群における分析結果

要因	変数	個人種目——対人種目				対人種目——集団種目				集団種目——個人種目			
		偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比	偏相関係数	ランク	相関比	偏相関比
現在生活動因	時間帯	0.1875	②	0.262	0.034	0.2999	③	0.212	0.104	0.2240	②	0.312	0.028
	場所	0.3852	①			0.4245	①			0.3697	①		
	仲間	0.1019	④			0.1786	⑬			0.1743	⑦		
	指導者	0.0826	⑨			0.0262	㉒			0.0676	⑱		
客体的要因	結婚	0.0126	㉑	0.286	0.032	0.0467	⑱	0.286	0.240	0.0161	⑱	0.331	0.084
	子供	0.0170	㉒			0.0157	㉑			0.0368	㉑		
	所得	0.0746	⑪			0.2229	⑨			0.1242	⑭		
	環境	0.1529	③			0.2005	⑪			0.0845	⑯		
主体的要因	余暇時間	0.0799	⑩	0.308	0.009	0.2228	⑩	0.424	0.012	0.1508	⑪	0.383	0.015
	余暇観	0.0474	⑱			0.3568	②			0.1820	④		
	技能	0.0395	⑱			0.2714	⑥			0.1692	⑧		
	好嫌態度	0.0617	⑮			0.1542	⑭			0.0775	⑰		
マミ要因	欲求	0.0225	⑱	0.314	0.018	0.1180	⑰	0.431	0.138	0.0604	⑱	0.392	0.072
	効用態度	0.0729	⑬			0.2451	⑦			0.1287	⑬		
	体力の自信	0.0720	⑭			0.1380	⑮			0.1106	⑮		
	運動不足感	0.0989	⑥			0.1868	⑫			0.1897	③		
運動経験因	テレビ	0.0400	⑰	0.326	0.018	0.1307	⑱	0.500	0.138	0.0418	㉒	0.433	0.072
	新聞	0.0938	⑦			0.1038	⑱			0.1303	⑫		
	きっかけ	0.0908	⑧			0.2752	④			0.1751	⑥		
	学校時代	0.0731	⑫			0.2722	⑤			0.1777	⑤		
運動経験因	クラブ経験	0.1011	⑤	0.326	0.018	0.2294	⑧	0.500	0.138	0.1639	⑨	0.433	0.072

図2 男子の継続的実施者群における要因追加による相関比の変化状況

図4 女子の継続的実施者群における要因追加による相関比の変化状況

図3 男子の非継続的実施者群における要因追加による相関比の変化状況

図5 女子の非継続的実施者群における要因追加による相関比の変化状況

ている。特に、女子の対人—集団種目間の判別において主体的要因の働きが強い。

その他の要因については、男女の集団—個人種目間、男子の個人—対人種目間、女子の対人—集団種目間でそれぞれ男子の継続型と同様な傾向を示し、前2要因に次いで運動経験要因、客体的要因

の順に関与している。男子では要因間に顕著な特徴は見られないが、女子では差がみられ、特に対人—集団種目間においては運動経験要因が強く働いている。一方、女子の個人—対人種目間では、女子の継続型と同様な傾向を示しているが関与度は低く、結果として相関比は最も低くなっている。

る。また、男子の対人一集団種目間の判別では、マスコミ要因、運動経験要因、客体的要因の順に働いているが、これらの差はあまり顕著なものではない。マスコミ要因に関しては、この例を除くと継続型と同様、各判別においてあまり関与しない傾向がみられる。

3. 変数の関与

これまで、実施種目間の判別を、性、実施頻度別に分析し、判別の精度とこれに働く要因の様相について検討してきたが、各々の段階における種目選択行動についてのより具体的な知見は、要因を構成する個々の変数の働きを検討することにより得ることができよう。これは各々の判別においてこれまで検討してきた要因の関与の様相が類似していても、変数レベルで捉えると異なった様相が存在することを示し、種目選択行動を特徴づけていくものと思われる。変数の関与は、偏相関係数の値とこれを基にしたランクを中心に、主な傾向について検討していく。結果は、表4～7に示している。

(1) 継続的实施者群

男女とも偏相関係数の値の高い変数は、前述した要因で強く関与していた現在活動要因、主体的要因を代表する変数である傾向がみられる。男子では、現在活動要因の「場所」「仲間」「時間帯」や運動経験要因の運動をはじめた「きっかけ」「学校時代」の運動経験などが各々の判別で共通して強く関与する傾向がみられる。また、対人一集団種目間の判別では上記の傾向に加えて「効用的態度」の関与が高く、例えば対人種目では心理的効用を、集団種目では社会的効用を目的として、各々の種目を選択していることがあげられる²⁴⁾。客体的要因の中では「余暇時間」が対人一集団種目間、個人一集団種目間で強く働いている。女子では、現在活動要因の各々の変数の関与の様相が、各判別において異なった傾向を示している。すなわち、個人一対人種目間、集団一個人種目間の判別では、特に「場所」が強く働いているのに対し、対人一集団種目間では「時間帯」が強く働いている。このことは、対人、集団種目と比較して個人種目ではスポーツを行う場所により選択がなされ、対人一集団種目間ではむしろ行う時間帯に

より選択がなされるものと考えられる。主体的要因では、個人一対人種目間、集団一個人種目間において、「運動不足感」や「好嫌態度」などの関与が高い傾向がみられる。すなわち、他と比較して個人種目では、スポーツに対して極端な好意を持ちそれを中心として選択がなされるのではなく、運動不足感からの、いわば必要²⁵⁾から最も実施しやすい個人種目という手段を用いるといった選択がここでは推測されよう。これは、客体的要因で強く働いている「所得」や「余暇時間」が、個人種目でとくに金や暇がない方向に働いている傾向を含めて考えていくとより明確になってこよう。

このような結果は、女子ほど明確ではないが、男子についても同様な傾向を示している。以上まとめると、継続型における種目選択は男子では、「場所」「仲間」「時間帯」などスポーツを実施していく上でかかわる条件に加え、運動・スポーツを始めた「きっかけ」や「学校時代」の運動経験など過去の運動経験を手掛かりとし、これが経年的に反復、強化されながら内面化し、「効用態度」や「余暇観」などをとおして選択が行われるといったプロセスが考えられる。一方、女子では、前述したように各々の種目選択において、それぞれ特徴ある選択の様相がみられたが、その特徴は男子においても女子ほどではないが同様な傾向を示している。

(2) 非継続的实施者群

非継続型においても男女各々で継続型と類似した傾向を示しているが、各々の種目選択に働く変数の様相は、さらに特徴あるものとなっている。男女のすべての判別において「場所」の関与が最も強く働いており、継続型と比較して実施する場所により種目選択が決定される傾向がみられる。次いで、男子では「仲間」の関与が高い傾向がみられるのに比べ、女子では「時間帯」が高く、男女の種目選択を比較すると、男子では一緒に行く仲間の関与をうけて選択がなされるのに対して、女子では1日のうちいつスポーツを実施するための時間がつくれるかによって、実施する種目が決定されているものと思われる。これは、女子の大半が主婦であることを考えれば、女子の種目選択

での重要な要因とすることができよう。

また、女子では、継続型で顕著でなかった運動経験要因の関与が高くみられ、運動を始めた「きっかけ」や「学校時代」の運動経験に加えて、他では低い値しか示していない学校時代の「クラブ経験」の関与が高いのが特徴としてあげられよう。個人種目の選択では、継続型と同様に「運動不足感」が強く働く傾向がみられる。また、対人一集団種目間の判別においても継続型と同様な傾向を示すが、非継続型では「技能」の値が高く、この段階の種目選択には自己の技能をどのように認知しているかが関わっているものと思われる。加えて、男子では客体的要因の中でも「既婚・未婚」や「子供」の有無が対人一集団種目間の判別に働いている。「指導者」の有無は、女子の個人一対人種目間において、継続型、非継続型のいずれにもやや強く関与している以外はあまり働いていない。女子において、継続型、非継続型とも「子供」の有無、「既婚・未婚」などの客体的要因があまり働いていないが、これは対象者が類似した傾向を持つためと考えられ、「時間帯」の結果を含めて考えると、このような変数の用い方では不十分であり、例えば子供の年代を変数としておればよりよく判別されたかも知れない。また、男女とも「体力への自信」は種目選択にあまり働いていないが、これも対象者を実施度により分け、その各々で比較したためであろう。以上変数の主な関与の傾向を示した。

結 語

スポーツ行動を意思決定の連続から成り立つと考え、この意思決定の一側面であると考えられるスポーツ活動での種目選択行動のメカニズムを明らかにすることを目的とした本研究は、要約すると以下のようにまとめることができる。

- (1)本研究で用いた5要因、21変数を説明変数とする判別では、継続型実施者群の方が非継続型実施者群よりも結果の精度が高く、さらに男子よりも女子の方が高かった。つまり、女子の継続型実施者群において、これらの説明変数が最も有効であったといえる。
- (2)5要因の関与の強さからみると、実施頻度、性

別および判別の組み合わせに関係なく現在活動要因が最も強く、次いで主体的要因の順となっていた^{注5)}。

- (3)他の要因に関しては群別した対象者の特徴がみられ、継続型では、男子で運動経験要因、女子で客体的要因がそれぞれの判別で一貫して強く関与していた。非継続型については、男子は継続型とほぼ同様な傾向を示すが、対人一集団種目間において運動経験要因、客体的要因、マスコミ要因の関与の差は殆んどみられなかった。一方、女子は個人一対人種目間で継続型と同様に客体的要因の関与が強くみられたが、対人一集団種目間、集団一個人種目間ではむしろ運動経験要因が強く関与する傾向がみられた。
- (4)変数についてみると、判別に強く関与している要因を代表する変数群がやはり強く関与する傾向がみられ、その関与の様相は、性、実施頻度ごとの各々の選択行動を特徴づけている。これは、個人、対人、集団の各種目を組み合わせ比較することにより得られた結果であり、また性、実施頻度による比較を通して各々の対象者群の種目選択行動の特徴を示したものである。この概要については、結果の項で述べているので、ここでは紙面の都合上省略する。

以上のような結果を得ることができたわけであるが、最後に問題点および課題について述べて総括としたい。

第1は、要因、変数に関することである。結果の精度の項において示したように、性、実施頻度、判別の組み合わせにより相関比が異なっており、男子においては特に低いものとなっている。すなわち、今回用いた変数群では、各々の種目選択を十分に判別できないものが存在していた。これまでのスポーツ行動に関する研究では、このような変数や変数を設定する枠組みとしての要因をいかに判別の精度を高め、有効な説明変数とするかといった点についてはあまり考えられておらず、各調査研究において類似した変数が用いられてきたようである。しかし、本研究が示すように、スポーツ行動のどの側面に焦点をあてるかにより、また、対象者の特性により、変数の関与の様相は異なったものであると思われるので、この

ような変数の用い方については今後さらに検討していく必要がある。

第2は、スポーツ行動についての研究の方向に関するものである。これまで実施頻度や種目選択に焦点をあて、スポーツ行動を解明しようとしてきたわけであるが、前述したように、スポーツ活動は多種多様な意思決定が複雑に絡みながら成り立っていると考えると、これまでの研究は、その一側面についてふれたにすぎない。今回は、種目選択行動を前研究の視点であった実施頻度をふまえながら分析してきたが、今後、このような研究の行い方も含めて、スポーツ行動の他の側面について継続的に研究を進めていく必要がある。（本稿は、日本体育学会28回大会にその一部を発表した。）

注

注1) スポーツ行動の概念は、ここではより広範なものと考え、顕在化していない段階まで含み、また時間的広がりにおいても、可視的なスポーツ活動に至るまでの経過とそれから後の予測的な領域の問題までも含む。

注2) スポーツ活動の実施頻度により対象者を群別するわけであるが、ここでは週レベル以上の実施度か否かを基準とした。すなわち、ほとんど毎日、週3日、週1回の実施者を継続的实施者、月1～2回、年4～5回の実施者を非継続的实施者とした。

注3) ここでは、林の行った方法を利用し、偏相関に対応する相関比は、はじめの要因での相関比を r_1 、さらに要因を加えたときの相関比を r_2 とすると、加えた要因についての偏相関比は、

$$1 - r_{1(2)}^2 = \frac{1 - r_2^2}{1 - r_1^2} \text{ によって示される。}$$

注4) このような記述は、カテゴリーに与えられた数値を検討することにより得られるが、本研究では分析結果が多く結果に示すことができなかったので省略した。

注5) 本研究では、このように各要因の関与の強さやそれら相互の順序を他との比較を通して検討してきたが、要因とそれを構成する変数との関係を統計的に検証していない。今後の課題である。

参考文献

- 1) 鮑戸 弘, 「数量化理論——社会行動研究における適用の効果と限界——」年報社会心理学 5 : 73—124, 1964.
- 2) 鮑戸 弘, 前出, 95.
- 3) 荒井貞光, 小村 晃, 杉山允宏, 松本純子, 松田泰定, 「スポーツ行動に関する実証的研究(1)」広島大学総合科学部紀要Ⅱ—1, 33—51, 1975.
- 4) 荒井貞光, 松田泰定, 「スポーツ行動に関する実証的研究(2)」体育学研究 22—3 : 137—52, 1977.
- 5) 調枝孝治他, 「社会体育の動機に関する調査, 第二報」昭和48年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, 1—5.
- 6) 藤原健固, スポーツと社会化, 道和書院, 1976, p. 87.
- 7) 林知己夫, 村山孝喜, 市場調査の計画と実際, 12版, 日刊工業新聞社, 1975. pp. 146—51.
- 8) 林知己夫, 樋口伊佐夫, 駒沢 勉, 情報処理と統計整理, 産業図書株式会社, 1976. pp. 11—14.
- 9) 池田 勝, 「運動不足」感を規定する生活環境因子の分析」第28回日本体育学会大会発表資料, 1977.
- 10) 井関利明, 「経済行動」富永健一(編), 社会学講座 8, 経済社会学, 東京大学出版会, 1974, pp 45—81.
- 11) 松田岩男, 現代スポーツ心理学, 日本体育社, 1967. pp. 27—28.
- 12) 三宅一郎, 中野嘉弘, 水野欽司, 山本嘉一郎, SPSS統計パッケージⅡ 解析編, 東洋経済新報社, 1977. pp. 184—85.
- 13) 永吉宏吉, 江橋慎四郎, 桑野 豊, 島崎 仁, 「スポーツ活動成立要因に関する研究, 一林の数量化理論を用いて——」日本体育学会第25回大会号, 187, 1976.
- 14) 富永健一, 「意思決定の社会学理論——行動過程の分析——」社会学評論, 8—3 : 52—84, 1958.
- 15) 富永健一他, 「消費行動の社会学的分析——家計調査による数量的研究——」社会学評論, 19—1 : 18—68, 1968.